



Title	「あの世」の違い：『伽婢子』と『剪灯新話』の比較を中心に
Author(s)	Shi, Yi
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100487
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「あの世」の違い

— 『伽婢子』と『剪灯新話』の比較を中心に—

SHI YI (日本学・研究生)

1. 背景・目的

『剪灯新話』は中国の明代の瞿佑(くゆう)により創作された怪異小説集で、当時の中国で非常に人気でありながらも、作者の思想が主流の儒学にふさわしくなかったため、禁書として扱われてきた。しかし、『剪灯新話』が日本に伝来し、『奇異雑談集』と『霊怪艸』により翻訳され、さらに浅井了意により翻案され『伽婢子』として受容されてからは、日本の怪異談に多大な影響をもたらした。その中で、『伽婢子』は、翻訳よりも一歩進め、日本の要素を取り入れて物語と融合させる翻案の技法を使って作られたものであるため、単純な翻訳よりも日本人に馴染まれている。浅井了意が翻案したとき、主に物語の時代、場所、人物の名前などの細部を日本のものに変えた。そして、浅井了意は『剪灯新話』の日本人にとって受け入れにくい部分を削除したり、変更したりもした。それにより、中国風から日本風の転換が巧みに成し遂げられた。

宇佐美喜三八(1935)は「伽婢子に於ける翻案について」の中に、『伽婢子』の68話ごとに対応している原典の中国種の作品を明らかにした。『剪灯新話』以外に、『剪灯餘話』、『夢遊錄』、『集異集』、『霊鬼志』、『博異志』、『牡丹雜篇』、『西陽雜俎』、『睽車志』、『才鬼記』、『劍俠傳』、『鉄圍山叢談』、『龍城録』、『異疾志』などの作品もあるが、一番多く引用されているのは『剪灯新話』である。したがって、本研究では『剪灯新話』を比較の素材として取り上げ、『伽婢子』との「あの世」についての違いを羅列した。なお、翻案というと、一つ避けてはいけけないのは物語の人物と地名など、明らかに読者に「中国の物語だ」と感じさせるところを、日本風のものにすることである。無論、日本風にされるところにも一定な「あの世」観を感じさせる場合もあるが、ほとんどの変更は単なる「日本に起きたことだと感じさせる」もので、「あの世」との関連性も薄いと判断できるので、研究の成果をはっきりするために、こういう部分は取り入れていないのである。

中国種の怪異談が日本に受容され、一つ多大な影響力を持つ作品となったことは、やはり日本と中国の「あの世」観はある程度共通していることを示している。しかし、浅井了意が翻案を行った際、どの部分が日本人の読者にとってなじまないと判断し、それを変更したり、削除したりしたのかという理由を分析することで、日本と中国の「あの世」観の相違点を明らかにすることができると思われる。さらに、浅井了意が行った編集を上げることにより、日本の「あの世」観の独特な部分も明らかになると思われる。どのような部分が不適合で、どのような編集が行われ、どのような変更が違和感を感じさせないのか、等を比較分析することで、日本と中国の「あの世」観の違いをより明確化し、日本の特徴を明らかにすることができるのではないと思われる。

2. 方法(アプローチ)

『伽婢子』の68話のうちに、『剪灯新話』から翻案されたのは18話がある。なお、この18話のうちには様々な種類の怪談がそろっており、「あの世」に対する描写が主題の物語や、幽霊、鬼などとの物語もあれば、幻の世界に対する描写が主題の物語もある。このように、「あの世」とのかかわりのない物語は五つがあり、具体は下の通りである。

- ① 巻の一 「龍宮の上棟」(主人公が龍宮に誘われ、たくさん見物した物語である)
- ② 巻の二 「十津川の仙境」(主人公が一つの山の奥に隠しており、誰も訪れたことのない村に入り、そこで見物した物語)
- ③ 巻の四 「夢のちぎり」(主人公の男女が夢を通じて知り合い、心を交わした物語)
- ④ 巻の五 「幽霊評諸将」(幽霊が出るが、その内容は日本歴史において有名な將軍たちへの評価であるため、日中両国の「あの世」についての比較の素材にならないと判断した)

- ⑤ 卷の十一「隠里」（主人公が山の奥に行くと、ネズミの妖怪の穴を横取ったサルの子供を殺して、さらわれた人を助けた物語）

以上の五話のうち、「幽霊評諸将」以外の四話は「あの世」ではなく、「異界」を主題にした物語であると思われる。「あの世」と「異界」の違いについては、諏訪春雄(1988)が『日本の幽霊』において論じた説に従う。諏訪のいう「異界」とは人間が日常生活を営む空間と重なり、あるいはその周辺に広がる非日常空間のことで、他界、あるいは「あの世」とは死後の世界である。

したがって、本発表は残りの13話を素材として取り上げ、13話ごとにその原典をと比較し、物語の中に「あの世」と関係のある、変更あるいは削除、増加された部分のみを抽出した。

3. 結果

本発表は『剪燈新話』から翻案された、『伽婢子』において「あの世」を主題として取り入れて表現した物語について、各原典と比較しながら分析を行った。まずは『伽婢子』の物語をあらすじで紹介し、その物語に対応する原典を探して比較分析をした。その違いについては、翻案作と原典とが明らかに異なっているものもあれば、人物の一言に微妙なずれが存在しているものもある。これらを全部抽出して集めたのが本発表の内容である。

「あの世」における相違点をこのように羅列して分析した結果、最も目につくのは宗教と関係する内容に対する変更である。

浅井了意は浄土真宗の僧侶で、仏教の教化を一つの理由として『伽婢子』の創作の意図として入れたようだが、瞿佑は宗教の傾向が明らかに示されておらず、『剪燈新話』の中の「あの世」に関する描写は「この世」との対照になっている。瞿佑が『剪燈新話』を創作した意図は戦争で混乱していた当時の中国社会への批判であったと考えられるが、明代以前の怪談集からの影響で怪異に関する内容には道教と仏教からの引用も見られる。

このような二人の作者の意図の違いが前提になっているため、分析の結果からもう一つ明らかに見えるのは、中国の原典における道教に関する部分が完全に削除されたことである。『剪燈新話』に道士が登場して幽霊を退治したり、怪異を目撃したりする内容が幅広くみられるが、それが『伽婢子』に翻案されたときに、ほとんど浅井了意により削除されている。さらに、『伽婢子』の物語の結末にはしばしば原典にはない、僧侶を呼び寄せて読経させて鎮魂する内容が加えられている。

そして、原典においては「あの世」での人間と幽霊、妖怪との訴訟の内容がたくさん描かれているが、それが日本に翻案された際ほとんど削除された。『伽婢子』は原典と比べると、主人公の怪異によりかけられた不幸や損害に対して無力な、反抗できない傾向を示しているといえるだろう。

最後に、翻案後加えられた内容には、筆者の日本の「あの世」観に対する理解とずれているところがあり、それは巻二の「真紅撃帯」と、巻六の「遊女宮木野」に登場した幽霊が現世に現れる前に、「閻魔大王」や「司録神」に暇をもらったことが幽霊の話から分かることである。この二点は原典に書かれていないため、浅井了意が翻案するときに加えた内容だと判断したが、やや違和感を感じている。

4. 今後の課題

本発表では『伽婢子』の原典の中の一部だけを取り上げて比較分析を行った。『剪燈新話』は一番多く引用されたとはいえ、また50話の内容が残されている。そして、比較された13話からわかる違いから、明確な結論に達することができないわけではなく、また日中両国の「あの世」に関する違いには不明瞭なところがたくさん存在している。したがって、これからの課題としては、残りの『伽婢子』の内容を原典とと比較して、分析を含めることである。さらに、『伽婢子』のように中国の作品から翻案されたほかの作品についても、同じ方法で比較分析を行い、日中両国の「あの世」観に関する違いへの理解を深めたい。

参考文献

- 浅井了意(1987).『伽婢子 / 浅井了意 [著]; 江本裕校訂』平凡社.
瞿佑(2013).『剪燈新話』浙江出版集団数字伝媒有限公司.
諏訪春雄(1988).『日本の幽霊』岩波書店, 24-27.
宇佐美喜三八(1935).「伽婢子に於ける翻案について」『国語と国文学』12(3), 53-56.